愛媛県東中予方言における
２字漢語のアクセント

秋　山　英　治

１．はじめに

愛媛県東中予地方には、「中央式」と「讃岐式」の２種類のタイプのアクセントが分布している。「中央式」と「讃岐式」の境界は、新居浜市中萩と同市船木の間（角野新田あたり）で、この境界以東に「讃岐式」、以西に「中央式」が分布している（秋山英治（2017））。つまり、愛媛県東中予地方に分布する「中央式」は、京阪地域に分布する「中央式」との間に、「讃岐式」を間に挟んだ飛び地的な「中央式」である。

愛媛県東中予地方に分布する「中央式」は、最も西に分布する「中央式」として、また中近世期の京都方言の特徴を残す「中央式」として、アクセント研究の初期段階から注目を集めてきた。しかし、その実態については、不明な部分も多い。

そこで、本稿では、愛媛県東中予地方に分布する「中央式」として、松山市と今治市の２地域をとりあげ、これらの地域を対象におこなった調査のなかから、２字漢語に着目して報告する。

２．調査の概要

２．１　話者

各地域の話者は、以下の通りである。話者の氏名・生年・性別（男性をｍ、女性をｆとする）の順に示す。なお、個人情報の観点から、話者の氏名をイニシャルで示す[1)]。

松山市　　Ｗ・Ｈ氏　1950年生まれ　ｆ
今治市　　Ｎ・Ｓ氏　1943年生まれ　ｍ

２．２　調査方法・調査語

調査方法は、話者に調査票を読んでもらう「読ませる調査」をおこなった。調査時期は、以下の通りである。

松山市　　W・H 氏　　2017年８月
今治市　　N・S 氏　　2017年６月

調査においては、漢語1,300語余を中心に、複合語に関するものなど、合計2,500語余を調査した。このうち、２字漢語については、先行研究との比較ができるように、長崎方言の２字漢語の実態を報告した松浦年男（2009）でとりあげている384語から370語を抽出して調査した。調査した語について、松浦年男（2009）の記述をもとに、前部要素について示すと、以下のようになる。

A 型形態素
運（ウン）、加（カ）、記（キ）、共（キョウ）、市（シ）、自（ジ）、
職（ショク）、石（セキ）、絶（ゼツ）、参（サン）、大（タイ）、中（チュウ）、
天（テン）、馬（バ）、本（ホン）
B 型形態素
愛（アイ）、王（オウ）、開（カイ）、軍（グン）、高（コウ）、作（サク）、
実（ジツ）、出（シュツ）、日（ニチ）、発（ハツ）、別（ベツ）、有（ユウ）

ただし、今回の調査では、前部要素・後部要素にわけての調査はしていない。調査語には、「運」「愛」など、形態素単独で用いられる語もあれば、「加」「開」のように形態素単独では用いられない語もある。そもそも形態素単独では用いられない語については、型の確認ができない。そこで、今回は、二形態素（漢字２字）のみの調査とした。

上記27の形態素には、「加」のように１拍１音節のもの、「職」のように２拍２音節のもの、「運」のように２拍１音節のものがある。前部要素が１拍１音節の場合には２拍１音節もしくは２拍２音節の後部要素を、前部要素が２拍２音節・２拍１音節には、１拍１音節・２拍１音節・２拍２音節の後部要素をつけた２字漢語となる[2)]。

本稿では、以下の表記を用いる。

○：任意の自立語の拍　　▽：任意の付属語の拍
「：大幅な上昇　　｜：大幅な下降

Ｈ：高い音調　　Ｌ：低い音調
０・１・２……：〈下げ核〉の位置（0は〈下げ核〉がない無核をあらわす）
重：重音節　　軽：軽音節　　#：形態素境界

３．松山市・今治市の２字漢語のアクセント

３．１　「式保存規則」

京都方言など〈式〉を有する京阪系諸方言では、「式保存規則」があることが知られている。松山市・今治市ともに、〈式〉を有することから、「式保存規則」についてとりあげるべきであるが、今回の調査では、前部形態素と後部形態素をわけて調査していないため、「式保存規則」について考察することができない。ただし、本稿で取りあげる２字漢語以外の語で、複合語に関する調査をしていることから、以下、「式保存規則」（複合語）について、簡単に触れておく[3)]。

松山市・今治市ともに、複合語では、「式保存規則」が守られている。〈下げ核〉の位置についても、松山市・今治市ともに、後部要素の拍数によって決まる。複合語アクセント規則については、京都方言と同じである。中井幸比古（2012b）をもとに、松山市・今治市で確認された例を示すと、以下のようになる。

後部要素が１拍の場合：-2型
「キンヨウ（H0）＋「ヒ｜（H1）→「キンヨウ｜ビ（H4）（金曜日）
カ「ヨウ（L0）＋「ヒ｜（H1）→　カ「ヨウ｜ビ（L3）（火曜日）
後部要素が２拍の場合：-3型
「ワ｜ラビ（H1）＋「モチ（H0）→「ワラビ｜モチ（H3）（蕨（わらび）餅）
ヨ「モギ（L0）＋「モチ（H0）→　ヨ「モギ｜モチ（L3）（蓬（よもぎ）餅）
後部要素が３拍の場合：-3型
「サクラ（H0）＋「マツリ（H0）　→「サクラマ｜ツリ（H4）（桜祭り）
ツ「バ｜キ（L2）＋「マツリ（H0）→ ツ「バキマ｜ツリ（L4）（椿祭り）
後部要素が４拍の場合：-4型
「ヌカ（H1）＋「ヨロコビ（H0）　→「ヌカヨ｜ロコビ（H3）（ぬか喜び）
キ「ソ｜（L2）＋「ケンキュウ（H0）→　キ「ソケ｜ンキュウ（L3）（基礎研究）

ただし、今治市では、前部要素が低起の１拍の場合、以下のように、「式保存規則」に反して、高起系列の〈式〉になる場合もある。

	今治市	※松山市
メ「(L0) + ク「ス｜リ（L2）（目薬）	→「メ｜グスリ（H1）	メ「グ｜スリ（L2）
ヨ「(L0) +「サクラ（H0）（夜桜）	→「ヨ｜ザクラ（H1）	ヨ「ザ｜クラ（L2）

中井幸比古（2012b）によれば、前部要素が低起の１拍の場合に、京都方言において今治市と同様の「式保存規則」の例外がみられることを指摘し、「特に年齢の上の世代のアクセントに多く、また古くからある単語に多い」と述べている。秋山英治（2017）で述べているように、今治市には、松山市にはみられない３拍名詞第２・４語類のH2型が残存しているが、「式保存規則」（複合語）においても松山市よりも古い状態であることがわかる[4)]。

２字漢語は、漢語１字と漢語１字の組み合わせであることから、「式保存規則」（複合語アクセント規則）で考えることができそうであるが、実はそうではない。京都方言の２字漢語について報告した小川晋史（2006）では、２字漢語において、複合語アクセント規則が成り立たないことを述べている。また、小川晋史（2006）では、２字漢字は、後部要素の拍数によって、有核となるか、それとも無核になるか（〈下げ核〉の有無）が決まる傾向があること、また前部要素の拍数によって、高起系列の〈式〉となるか、それとも低起系列の〈式〉となるかが決まる傾向があることを述べている。

上述したように、今回の調査では、前部要素と後部要素にわけての調査はしていないことから、「式保存規則」についての考察ではなく、小川晋史（2006）をもとに、前部要素・後部要素の拍数・音節構造に注目して考察をおこなう。なお、考察において、松山市・今治市の特徴を明らかにするために、比較対象として平山輝男編（1960）所収の京都方言もとりあげることとする[5)]。

３．２　〈下げ核〉の有無

後部要素の拍数に注目して、〈下げ核〉の有無（〈下げ核〉がある場合、どこにあるのか）がどのように決まるかについてみていく。

３．２．１　後部要素が１拍の場合

後部要素が１拍の場合、以下の【表１】のようになる[6)]。

【表１】３拍語・後部要素１拍一覧

	有　核				無　核			合　計
	H1型	H2型	L2型	小計	H0型	L0型	小計	
松　山	39	1	1	41	3	33	36	77
	50.6%	1.3%	1.3%	53.2%	3.9%	42.9%	46.8%	100.0%
今　治	36	1	6	43	1	34	35	78
	46.2%	1.3%	7.7%	55.1%	1.3%	43.6%	44.9%	100.0%
京　都	36	1	5	42	8	26	34	76
	47.4%	1.3%	6.6%	55.3%	10.5%	34.2%	44.7%	100.0%

【表１】より、松山市・今治市と、京都方言とに大きな違いはないことがわかる。有核が55％程度、無核が45％程度で、やや有核が多い。

この結果は、本稿と同じ平山輝男編（1960）所収の京都方言を調査した小川晋史（2006）の記述と異なる。小川晋史（2006）によれば、京都方言では、後部要素が１拍の場合、有核が68％、無核が32％という結果となっており、後部要素が１拍の場合、有核になる傾向があることを指摘している。確かに、松山市・今治市ともに、無核よりも有核が多いものの、上述したようにやや多い程度であり、小川晋史（2006）ほど顕著な傾向はみられない。本調査の京都方言においても、松山市・今治市と同様に、有核がやや多いという結果となっている。小川晋史（2006）の調査語数の方が多いことから、本稿でとりあげた語が偏っている可能性も考えられなくもないが[7)]、３．４で詳述する、前部要素に促音を含む語が関係している。単純に調査語数の多寡による違いではないと考えられる。

無核について詳しくみると、松山市・今治市・京都方言すべての地域において、L0型の比率が高く、低起系列の〈式〉となる傾向がある。高起系列のH0型が、京都方言では８語あるものの、L0型の1/3以下であり、決して多くない。このことから、後部要素が１拍で、全体が無核の場合、低起系列の〈式〉になる傾向があることがわかる。

後部要素が１拍の場合について、さらに音節構造別にわけてみると、以下の【表２】のようになる。

【表２】３拍語・後部要素１拍・音節構造別一覧

		有　核				無　核			合　計
		H1型	H2型	L2型	小計	H0型	L0型	小計	
松　山	重#軽	32	0	0	32	0	28	28	60
		53.3%	0.0%	0.0%	53.3%	0.0%	46.7%	46.7%	100.0%
	軽軽#軽	7	1	1	9	3	5	8	17
		41.2%	5.9%	5.9%	52.9%	17.6%	29.4%	47.1%	100.0%
今　治	重#軽	27	0	5	32	0	28	28	60
		45.0%	0.0%	8.3%	53.3%	0.0%	46.7%	46.7%	100.0%
	軽軽#軽	9	1	1	11	1	6	7	18
		50.0%	5.6%	5.6%	61.1%	5.6%	33.3%	38.9%	100.0%
京　都	重#軽	27	1	4	32	4	23	27	59
		45.8%	1.7%	6.8%	54.2%	6.8%	39.0%	45.8%	100.0%
	軽軽#軽	9	0	1	10	4	3	7	17
		52.9%	0.0%	5.9%	58.8%	23.5%	17.6%	41.2%	100.0%

【表２】より、松山市・今治市・京都方言すべての地域において、音節構造が「重＃軽」「軽軽＃軽」の場合、無核よりも有核の比率が高いことがわかる。一見すると、小川晋史（2006）がいう、後部要素が１拍の場合、有核になる傾向があるといえそうである。しかし、有核の比率が、無核と比べて顕著に高いわけではない。「重＃軽」については、松山市・今治市・京都方言すべての地域において、有核と無核の比率はほぼ同じである。小川晋史（2006）によれば、「重＃軽」の有核の比率は69％となっており、本調査の京都方言と15ポイントの差がある。このような違いがみられるのは、前部要素に促音を含む語が関係していると考えられる（詳細については、３．４で述べる）。

「軽軽＃軽」においても、有核の比率が、松山市52.9％、今治市61.1％、京都方言58.8％、小川晋史（2006）の京都方言59％で、無核と比べて顕著に高いということはできない。どちらかといえば、有核の比率が高いということはいえるが、これらの結果から、小川晋史（2006）のいうように、〈下げ核〉の有無が、後部要素の拍数によって決まるということは難しい。

３．２．２　後部要素が２拍の場合

後部要素が２拍の場合、以下の【表３】【表４】のようになる。

【表３】３拍語・後部要素２拍一覧

	有　核				無　核			合　計
	H1型	H2型	L2型	小計	H0型	L0型	小計	
松　山	10	0	0	10	4	40	44	54
	18.5%	0.0%	0.0%	18.5%	7.4%	74.1%	81.5%	100.0%
今　治	13	0	0	13	3	39	42	55
	23.6%	0.0%	0.0%	23.6%	5.5%	70.9%	76.4%	100.0%
京　都	12	0	1	13	3	38	41	54
	22.2%	0.0%	1.9%	24.1%	5.6%	70.4%	75.9%	100.0%

【表４】４拍語・後部要素２拍一覧

	有　核							無　核			合　計
	H1型	H2型	H3型	L2型	L3型	L4型	小計	H0型	L0型	小計	
松　山	23	5	0	3	0	0	31	108	103	211	242
	9.5%	2.1%	0.0%	1.2%	0.0%	0.0%	12.8%	44.6%	42.6%	87.2%	100.0%
今　治	23	3	4	4	3	1	38	118	94	212	250
	9.2%	1.2%	1.6%	1.6%	1.2%	0.4%	15.2%	47.2%	37.6%	84.8%	100.0%
京　都	16	3	0	7	0	0	26	167	43	210	236
	6.8%	1.3%	0.0%	3.0%	0.0%	0.0%	11.0%	70.8%	18.2%	89.0%	100.0%

【表３】より、３拍語については、有核が18.1％～24.1％、無核が75.9％～81.9％で、比率としては地域による差があるものの、松山市・今治市・京都方言すべての地域において、無核の比率が高いことがわかる。

【表４】より、４拍語については、松山市・今治市・京都方言すべての地域において、有核が15％弱程度、無核が85％程度で、３拍語と同様に無核の比率が高いことがわかる。小川晋史（2006）によれば、京都方言では、後部要素が２拍の場合、無核になる傾向があることを指摘しており、本稿の結果も同様の傾向を示している。

ただし、無核についてみると、３拍語と４拍語とで違いがある。３拍語では、松山市・今治市・京都方言すべての地域において、大半が低起系列の〈式〉となるのに対して、４拍語では、松山市・今治市は、高起系列の〈式〉と低起系列の〈式〉がほぼ同じ比率となり、京都方言では、３拍語とは反対に高起系列の〈式〉の比率が高い。

後部要素が２拍語の場合について、さらに音節構造別にわけてみると、以下の【表５】【表６】のようになる。

【表５】３拍語・後部要素２拍・音節構造別一覧

		有　核				無　核			合　計
		H1型	H2型	L2型	小計	H0型	L0型	小計	
松　山	軽#重	7	0	0	7	4	21	25	32
		21.9%	0.0%	0.0%	21.9%	12.5%	65.6%	78.1%	100.0%
	軽#軽軽	3	0	0	3	0	19	19	22
		13.6%	0.0%	0.0%	13.6%	0.0%	86.4%	86.4%	100.0%
今　治	軽#重	9	0	0	9	3	22	25	34
		26.5%	0.0%	0.0%	26.5%	8.8%	64.7%	73.5%	100.0%
	軽#軽軽	4	0	0	4	0	17	17	21
		19.0%	0.0%	0.0%	19.0%	0.0%	81.0%	81.0%	100.0%
京　都	軽#重	4	0	1	5	2	22	24	29
		13.8%	0.0%	3.4%	17.2%	6.9%	75.9%	82.8%	100.0%
	軽#軽軽	8	0	0	8	1	16	17	25
		32.0%	0.0%	0.0%	32.0%	4.0%	64.0%	68.0%	100.0%

【表５】より、３拍語について、京都方言では、「軽＃軽軽」の有核の比率が32.0％で、松山市・今治市よりやや高いことがわかる。語数がそれほど多くないため、単純にいうことはできないが、小川晋史（2006）においても、「軽＃軽軽」の有核が28％で、「軽＃重」より10ポイント高くなっており、本調査の結果と同様の傾向を示している。京都方言では、「軽＃重」よりも「軽＃軽軽」の方が有核になる傾向が認められそうである。

語数がひじょうに少なく、また京都方言に例外があるものの、松山市・今治市において、H0型は「軽＃重」にしかみられない。L0型がもともと多くあるとはいえ、L0型が「軽＃重」「軽＃軽軽」ともにみられるのに対して、H0型が「軽＃重」に偏ってみられるのは特徴的である。小川晋史（2006）によれば、H0型の比率が、「軽＃重」では1863語中385語（20.6％）、「軽＃軽軽」では363語中45語（12.4％）となっており、「軽＃軽軽」の方が比率が低い。松山市・今治市ほどの顕著な偏りはないものの、京都方言においても、H0型は「軽＃軽軽」よりも「軽＃重」の方が多い傾向があるといえよう。

【表６】より、４拍語については、上述したように、松山市・今治市・京都方言すべての地域において、無核の比率が高いことがわかる。しかし、詳しくみると、松山市・今治市では、H0型とL0型が同程度の比率であるのに対して、京都方言ではH0型の比率が高いという違いがある。無核について、音節構造からみると、京都方言においては、音節構造による差はほぼなく、「重＃重」「重＃軽軽」「軽軽＃重」「軽軽＃軽軽」すべてで、多くがH0型である。小川晋史（2006）においても、音節構造による差はなく、多くがH0型となっており、同様の傾向が認められる。

一方、松山市・今治市においては、音節構造によって比率の差がある。一部違う

【表６】４拍語・後部要素２拍・音節構造別一覧

		有　核							無　核			合　計
		H1型	H2型	H3型	L2型	L3型	L4型	小計	H0型	L0型	小計	
松　山	重#重	14	0	0	1	0	0	15	60	73	133	148
		9.5%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	0.0%	10.1%	40.5%	49.3%	89.9%	100.0%
	重#軽軽	6	0	0	2	0	0	8	19	20	39	47
		12.8%	0.0%	0.0%	4.3%	0.0%	0.0%	17.0%	40.4%	42.6%	83.0%	100.0%
	軽軽#重	3	3	0	0	0	0	6	24	8	32	38
		7.9%	7.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	15.8%	63.2%	21.1%	84.2%	100.0%
	軽軽#軽軽	0	2	0	0	0	0	2	5	2	7	9
		0.0%	22.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	22.2%	55.6%	22.2%	77.8%	100.0%
今　治	重#重	13	1	0	2	1	1	18	69	63	132	150
		8.7%	0.7%	0.0%	1.3%	0.7%	0.7%	12.0%	46.0%	42.0%	88.0%	100.0%
	重#軽軽	5	0	4	2	2	0	13	12	27	39	52
		9.6%	0.0%	7.7%	3.8%	3.8%	0.0%	25.0%	23.1%	51.9%	75.0%	100.0%
	軽軽#重	3	2	0	0	0	0	5	30	4	34	39
		7.7%	5.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	12.8%	76.9%	10.3%	87.2%	100.0%
	軽軽#軽軽	2	0	0	0	0	0	2	7	0	7	9
		22.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	22.2%	77.8%	0.0%	77.8%	100.0%
京　都	重#重	5	2	0	5	0	0	12	104	27	131	143
		3.5%	1.4%	0.0%	3.5%	0.0%	0.0%	8.4%	72.7%	18.9%	91.6%	100.0%
	重#軽軽	5	0	0	2	0	0	7	27	12	39	46
		10.9%	0.0%	0.0%	4.3%	0.0%	0.0%	15.2%	58.7%	26.1%	84.8%	100.0%
	軽軽#重	4	1	0	0	0	0	5	29	4	33	38
		10.5%	2.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	13.2%	76.3%	10.5%	86.8%	100.0%
	軽軽#軽軽	2	0	0	0	0	0	2	7	0	7	9
		22.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	22.2%	77.8%	0.0%	77.8%	100.0%

傾向を示しているところがあるものの、「重＃重」「重＃軽軽」では、H0型とL0型がほぼ同程度の比率であるのに対して、「軽軽＃重」「軽軽＃軽軽」では、L0型の比率が低く、H0型の比率の方が高い。これは、無核において、音節構造で、高起系列の〈式〉となるのか、それとも低起系列の〈式〉となるのかが決まることを示している。

以上より、後部要素が２拍の場合、松山市・今治市・京都方言すべての地域において、小川晋史（2006）の記述と同様に、無核の比率が高いという傾向を示していた。しかし、後部要素が１拍の場合は、小川晋史（2006）の記述とは異なり、松山市・今治市において、無核と有核の比率はほぼ同じであった。このことから、松山市・今治市では、小川晋史（2006）のいうように、後部要素の長さによって〈下げ核〉の有無が決まるとはいえない。松山市・今治市において、「軽＃重」「軽＃軽軽」「軽軽＃重」「軽軽＃軽軽」「重＃重」「重＃軽軽」では、有核より無核の比率が高く、「重＃軽」「軽軽＃軽」では、無核と有核の比率がほぼ同じ比率であることから、前部要素と後部要素の組み合わせによって〈下げ核〉の有無が決まる傾向があると考えられる。具体的には、「1+2」「2+2」の場合、無核となり、「2+1」の場合、無核と有核が

ほぼ同じ比率になるということである[8)]。

３．３　〈式〉の決定

前部要素の拍数に注目して、〈式〉がどのように決まるのかについてみていく。

３．３．１　３拍語の場合

３拍語について、音節構造別の〈式〉を示すと、以下の【表７】のようになる。

【表７】より、今治市の「重＃軽」が例外的であるものの、それを除いて松山市・今治市・京都方言すべての地域において、前部要素が１拍の場合（「軽＃重」「軽＃軽軽」）には、低起系列の〈式〉の比率が高く、前部要素が２拍の場合（「重＃軽」「軽軽＃軽」）には、高起系列の〈式〉の比率が高いことがわかる。この傾向は、小川晋史（2006）の結果と同じである。

しかし、「重＃軽」において、高起系列の〈式〉の比率が、小川晋史（2006）の結果ほど高くない。小川晋史（2006）では、高起系列の〈式〉が74％であるが、松山市では、高起系列の〈式〉が53.3％、低起系列の〈式〉が46.7％で、高起系列の〈式〉

【表７】３拍語・音節構造別一覧

		高起				低起			合計
		H0型	H1型	H2型	小計	L0型	L2型	小計	
松山	重#軽	0	32	0	32	28	0	28	60
		0.0%	53.3%	0.0%	53.3%	46.7%	0.0%	46.7%	100.0%
	軽#重	4	7	0	11	21	0	21	32
		12.5%	21.9%	0.0%	34.4%	65.6%	0.0%	65.6%	100.0%
	軽軽#軽	3	7	1	11	5	1	6	17
		17.6%	41.2%	5.9%	64.7%	29.4%	5.9%	35.3%	100.0%
	軽#軽軽	0	3	0	3	19	0	19	22
		0.0%	13.6%	0.0%	13.6%	86.4%	0.0%	86.4%	100.0%
今治	重#軽	0	27	0	27	28	5	33	60
		0.0%	45.0%	0.0%	45.0%	46.7%	8.3%	55.0%	100.0%
	軽#重	3	9	0	12	22	0	22	34
		8.8%	26.5%	0.0%	35.3%	64.7%	0.0%	64.7%	100.0%
	軽軽#軽	1	9	1	11	6	1	7	18
		5.6%	50.0%	5.6%	61.1%	33.3%	5.6%	38.9%	100.0%
	軽#軽軽	0	4	0	4	17	0	17	21
		0.0%	19.0%	0.0%	19.0%	81.0%	0.0%	81.0%	100.0%
京都	重#軽	4	27	1	32	23	4	27	59
		5.3%	35.5%	1.3%	54.2%	30.3%	5.3%	45.8%	100.0%
	軽#重	2	4	0	6	22	1	23	29
		6.9%	13.8%	0.0%	20.7%	75.9%	3.4%	79.3%	100.0%
	軽軽#軽	4	9	0	13	3	1	4	17
		23.5%	52.9%	0.0%	76.5%	17.6%	5.9%	23.5%	100.0%
	軽#軽軽	1	8	0	9	16	0	16	25
		4.0%	32.0%	0.0%	36.0%	64.0%	0.0%	64.0%	100.0%

と低起系列の〈式〉の比率に大きな差はない。上述したように、今治市の「重＃軽」は、例外的に、高起系列の〈式〉が45.0％、低起系列の〈式〉が55.0％と、低起系列の〈式〉の比率の方が高いものの、その差は大きなものではない。これらの結果から考えると、松山市・今治市においては、小川晋史（2006）がいう、前部要素が１拍の場合、低起系列の〈式〉になり、前部要素が２拍の場合、高起系列の〈式〉になるという傾向を認めることはできない。つまり、前部要素の拍数によって、〈式〉が決定するとはいえない。それは、４拍語の状況をみても同様である。

３．３．２　４拍語の場合

４拍語について、音節構造別の〈式〉を示すと、以下の【表８】のようになる。

【表８】より、松山市・今治市において、「重＃重」「重＃軽軽」の場合、高起系列の〈式〉と低起系列の〈式〉の比率が同程度となり、「軽軽＃重」「軽軽＃軽軽」の場合、高起系列の〈式〉の比率の方が高くなる、つまり音節構造によって違いがあることがわかる。一方、京都方言は、音節構造に関係なく、高起系列の〈式〉の比率が

【表８】４拍語・音節構造別一覧

		高　起					低　起					合　計
		H0型	H1型	H2型	H3型	小計	L0型	L2型	L3型	L4型	小計	
松　山	重#重	60	14	0	0	74	73	1	0	0	74	148
		40.5%	9.5%	0.0%	0.0%	50.0%	49.3%	0.7%	0.0%	0.0%	50.0%	100.0%
	重#軽軽	19	6	0	0	25	20	2	0	0	22	47
		40.4%	12.8%	0.0%	0.0%	53.2%	42.6%	4.3%	0.0%	0.0%	46.8%	100.0%
	軽軽#重	24	3	3	0	30	8	0	0	0	8	38
		63.2%	7.9%	7.9%	0.0%	78.9%	21.1%	0.0%	0.0%	0.0%	21.1%	100.0%
	軽軽#軽軽	5	0	2	0	7	2	0	0	0	2	9
		55.6%	0.0%	22.2%	0.0%	77.8%	22.2%	0.0%	0.0%	0.0%	22.2%	100.0%
今　治	重#重	69	13	1	0	83	63	2	1	1	67	150
		46.0%	8.7%	0.7%	0.0%	55.3%	42.0%	1.3%	0.7%	0.7%	44.7%	100.0%
	重#軽軽	12	5	0	4	21	27	2	2	0	31	52
		23.1%	9.6%	0.0%	7.7%	40.4%	51.9%	3.8%	3.8%	0.0%	59,6%	100.0%
	軽軽#重	30	3	2	0	35	4	0	0	0	4	39
		76.9%	7.7%	5.1%	0.0%	89.7%	10.3%	0.0%	0.0%	0.0%	10.3%	100.0%
	軽軽#軽軽	7	2	0	0	9	0	0	0	0	0	9
		77.8%	22.2%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
京　都	重#重	104	5	2	0	111	27	5	0	0	32	143
		72.7%	3.5%	1.4%	0.0%	77.6%	18.9%	3.5%	0.0%	0.0%	22.4%	100.0%
	重#軽軽	27	5	0	0	32	12	2	0	0	14	46
		58.7%	10.9%	0.0%	0.0%	69.6%	26.1%	4.3%	0.0%	0.0%	30.4%	100.0%
	軽軽#重	29	4	1	0	34	4	0	0	0	4	38
		76.3%	10.5%	2.6%	0.0%	89.5%	10.5%	0.0%	0.0%	0.0%	10.5%	100.0%
	軽軽#軽軽	7	2	0	0	9	0	0	0	0	0	9
		77.8%	22.2%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%

高い傾向にある。小川晋史（2006）によれば、本調査の京都方言と同様に、音節構造に関係なく、高起系列の〈式〉の比率が高いことを指摘している。上述したように、３拍語においても、「重＃軽」の場合に、地域によって比率が違うものの、高起系列の〈式〉と低起系列の〈式〉の比率は同程度であった。これらの結果から、松山市・今治市において、〈式〉の決定に音節構造が関与していると考えられる。

３．４　前部要素の促音の有無

３．４．１　愛媛県東中方言と長崎方言

前部要素が「重」の場合について、詳しくみたところ、松山市・今治市では、以下のように、前部要素に促音を含むかどうかで、〈式〉がかわることがわかった。

	松山市	今治市	京都方言
出席（シュッセキ）	L0	L0	H0
出撃（シュツゲキ）	H0	H0	H0

同形態素において、促音を含む場合は、低起系列の〈式〉になり、促音を含まない場合は、高起系列の〈式〉になる。松浦年男（2014）によれば、鹿児島方言とともに二型アクセントとして知られる長崎方言において、２拍＋１拍の２字漢語の場合、前部要素に促音を含むかどうかで、トーンがかわることを指摘している。松浦年男（2014）によれば、促音を含む場合はＢ型に、促音を含まない場合はＡ型となる。長崎方言（鹿児島方言）のＢ型は、もともと京都方言において低起系列の〈式〉であったものが変化したといわれている。長崎（鹿児島）と愛媛東中予地方という地理的に遠く離れ、またアクセント付与システムの異なる地域において、前部要素に促音を含む語が、低起系列の〈式〉（低起系列由来といわれるトーン）になるという同様の現象がみられるのは、ひじょうに興味深い。

３．４．２　促音の有無による調査結果

そこで、松山市・今治市、平山輝男編（1960）所収の京都方言・鹿児島方言、さらに松浦年男（2009）の長崎方言において、同形態素で、促音を含む場合と含まない場合で、どちらの〈式〉をとるのか（鹿児島方言・長崎方言はＡ型・Ｂ型どちらのトーンをとるのか）を調査した。その結果を示すと、以下の【表９】～【表12】のようになる。【表９】【表10】が３拍語、【表11】【表12】が４拍語の結果である。なお、松浦年男（2009）では、調査した４人すべての話者の型を示していることから、本稿でも１人ずつの発音を1語としてカウントした。長崎方言の総語数が他の地域の４倍と

【表９】３拍語　松山市・今治市・京都方言

		高　起				低　起			合計
		H0型	H1型	H2型	小計	L0型	L2型	小計	
松　山	促音あり	0	1	0	1	20	0	20	21
		0.0%	4.8%	0.0%	4.8%	95.2%	0.0%	95.2%	100.0%
	促音なし	3	7	1	11	5	1	6	17
		17.6%	41.2%	5.9%	64.7%	29.4%	5.9%	35.3%	100.0%
今　治	促音あり	0	2	0	2	19	0	19	21
		0.0%	9.5%	0.0%	9.5%	90.5%	0.0%	90.5%	100.0%
	促音なし	3	7	1	11	6	1	7	18
		16.7%	38.9%	5.5%	61.1%	33.3%	5.5%	38.9%	100.0%
京　都	促音あり	4	0	1	5	16	0	16	21
		19.0%	0.0%	4.8%	23.8%	76.2%	0.0%	76.2%	100.0%
	促音なし	6	7	0	13	3	1	4	17
		35.3%	41.2%	0.0%	76.4%	17.6%	5.9%	23.5%	100.0%

【表10】３拍語　鹿児島・長崎

		A型	B型	合計
鹿児島	促音あり	3	18	21
		14.3%	85.7%	100.0%
	促音なし	13	4	17
		76.5%	23.5%	100.0%
長崎	促音あり	2	82	84
		2.4%	97.6%	100.0%
	促音なし	35	33	68
		51.5%	48.5%	100.0%

【表11】４拍語　松山市・今治市・京都方言

		高　起					低　起					合計
		H0型	H1型	H2型	H3型	小計	L0型	L2型	L3型	L4型	小計	
松　山	促音あり	1	4	0	0	5	56	0	0	0	56	61
		1.6%	6.6%	0.0%	0.0%	8.2%	91.8%	0.0%	0.0%	0.0%	91.8%	100.0%
	促音なし	28	3	5	0	36	10	0	0	0	10	46
		60.9%	6.5%	10.9%	0.0%	78.3%	21.7%	0.0%	0.0%	0.0%	21.7%	100.0%
今　治	促音あり	20	4	0	1	25	36	0	0	0	36	61
		32.8%	6.6%	0.0%	1.6%	41.0%	59.0%	0.0%	0.0%	0.0%	59.1%	100.0%
	促音なし	36	5	2	0	43	4	0	0	0	4	47
		76.60%	10.60%	4.30%	0.00%	91.5%	8.50%	0.00%	0.00%	0.00%	8.5%	100.00%
京　都	促音あり	48	0	2	0	50	10	0	0	0	10	60
		60.0%	0.0%	3.3%	0.0%	83.3%	16.7%	0.0%	0.0%	0.0%	16.7%	100.0%
	促音なし	35	6	1	0	42	3	0	0	0	3	45
		77.8%	13.3%	2.2%	0.0%	93.3%	6.7%	0.0%	0.0%	0.0%	6.7%	100.0%

【表12】４拍語　鹿児島・長崎

		A型	B型	合計
鹿児島	促音あり	13	47	60
		21.7%	78.3%	100.0%
	促音なし	14	30	44
		31.2%	68.2%	100.0%
長崎	促音あり	16	224	240
		6.7%	93.3%	100.0%
	促音なし	39	137	176
		22.2%	77.8%	100.0%

なっているのは、このためである。

【表９】より、松山市・今治市ともに前部要素に促音を含む場合、90％を超える比率で低起系列の〈式〉となり、促音を含まない場合、60％強の比率で高起系列の〈式〉となっていることがわかる。この結果から、松山市・今治市においては、前部要素に促音を含む場合、低起系列の〈式〉となり、促音を含まない場合、高起系列の〈式〉となる、つまり前部要素の促音の有無によって〈式〉が決定する傾向が認められる。京都方言においては、前部要素に促音を含む場合、低起系列の〈式〉となる比率が、松山市・今治市ほど高くはないものの、前部要素に促音を含む場合、低起系列の〈式〉の比率が76.2％、促音を含まない場合、高起系列の〈式〉の比率が76.4％となっており、松山市・今治市と同様に、前部要素の促音の有無によって〈式〉が決定する傾向が認められる。

【表10】より、鹿児島方言・長崎方言ともに、前部要素に促音を含む場合、（低起系列の〈式〉由来といわれる）B 型となり、促音を含まない場合、（高起系列の〈式〉由来といわれる）A 型となることがわかる。

【表11】より、松山市・今治市と京都方言とで違いがあることがわかる。松山市では、３拍語と同様に、前部要素に促音を含む場合、90％を超える比率で低起系列の〈式〉となり、促音を含まない場合、80％弱の比率で高起系列の〈式〉となる。つまり、前部要素の促音の有無によって〈式〉が決定している。今治市においても、前部要素に促音を含む場合、60％弱の比率で低起系列の〈式〉となり、促音を含まない場合、90％を超える比率で高起系列の〈式〉となり、松山市と同様に、前部要素の促音の有無によって〈式〉が決定する傾向が認められる。ただし、今治市は、松山市と比べると、前部要素に促音を含む場合に低起系列の〈式〉となる比率が30ポイント程低く、松山市より、前部要素の促音の有無が〈式〉の決定に関与する傾向が弱いようにみえる。

そこで、今治市において、個々の語がどのような状況を呈しているのか、確認したところ、形態素が「実」「職」「絶」「日」で促音を含む場合には、高起系列の〈式〉

となることはまれで、形態素が「出」「発」で促音を含む場合に、高起系列の〈式〉となることが多いという、形態素による違いがみられた。かりに形態素が「出」「発」の場合で、高起系列の〈式〉になるものを例外とみなして、それらを除外してみると、高起系列の〈式〉の比率が16.3%、低起系列の〈式〉の比率が83.7%となり、松山市の比率に近づく。今治市では、〈式〉の決定に、語彙的要素（前部要素の〈式〉が２字漢字に影響するとするならば「式保存規則」）も関与している可能性がある。今回の調査では、前部要素について調査していないことから、現時点ではこれ以上のことは不明である。語彙的な面については、今後の課題である。

京都方言は、松山市・今治市とは異なり、前部要素が促音を含む場合も、また含まない場合も、80%以上が高起系列の〈式〉となる。３拍語においては、松山市・今治市と同様に、前部要素の促音の有無によって〈式〉がかわる（決定する）傾向が認められたが、４拍語ではそのような傾向が認められない。拍数によって異なった結果となっている。

【表12】より、鹿児島方言・長崎方言ともに、前部要素に促音を含む場合も、含まない場合も、低起系列の〈式〉が由来といわれるB型の比率が高くなっていることがわかる。高起系列の〈式〉の比率が高い京都方言と逆のような結果となっているが、鹿児島方言・長崎方言ともに、京都方言と同様に、拍数によって異なる結果となっている。

３．４．３　前部要素の促音の扱い

松浦年男（2014）は、長崎方言において、３拍語では、前部要素の促音の有無がトーンの決定に関与していることを認めつつも、４拍語では、前部要素の促音の有無によるトーンの違いがみられないことから、前部要素に促音を含む語を除外して考察している。同様に、松山市・今治市・京都方言においても、前部要素に促音を含む場合を例外とみなして除外してみると、以下の【表13】のようになる。

【表13】より、３・４拍語ともに、音節構造が「重＃」において、高起系列の〈式〉の比率が高まり、小川晋史（2006）と同様の結果を示すようになる。つまり、小川晋史（2006）のいうように、前部要素の拍数によって〈式〉が決定する傾向が認められる[9)]。具体的なデータは省略するが、〈下げ核〉の有無についても、３・４拍語ともに、小川晋史（2006）と同様に、「重＃」における有核の比率が高まり、小川晋史（2006）のいうように、後部要素の拍数によって〈下げ核〉の有無が決定する傾向が認められるようになる。

しかし、同形態素である以上、促音を含む場合も含まない場合も同じものとして扱うのがよいのではないだろうか。３拍語のみとはいえ、松山市・今治市と地理的に遠

【表13】「重＃」の〈式〉

			高起	低起	合　計
松　山	3拍	重#軽	31	8	39
			79.5%	20.5%	100.0%
	4拍	重#重	69	29	98
			70.4%	29.6%	100.0%
		重#軽軽	25	11	36
			69.4%	30.6%	100.0%
今　治	3拍	重#軽	25	14	39
			64.1%	35.9%	100.0%
	4拍	重#重	61	40	101
			60.4%	39.6%	100.0%
		重#軽軽	18	22	40
			45.0%	55.0%	100.0%
京　都	3拍	重#軽	27	11	38
			71.1%	28.9%	100.0%
	4拍	重#重	69	25	29
			73.4%	26.6%	100.0%
		重#軽軽	24	11	17
			68.6%	31.4%	100.0%

く離れ、アクセント付与システムの異なる鹿児島方言・長崎方言において、前部要素の促音の有無によってトーン（松山市・今治市では〈式〉）が決まるという共通性がみられることは看過できない。３拍語ということでいえば、上述したように、京都方言においても、前部要素の促音の有無が〈式〉の決定に関与している。前部要素に促音を含む２字漢語の語数が多くないため断言はできないものの、中井幸比古（2002）をみると、「絶景」「絶交」「絶壁」など前部要素に促音を含む語において、京都方言では高起系列の〈式〉（H0型）となるのに対して、古形を残す京都周辺部では低起系列の〈式〉（L0型）となる例が散見される。京都周辺部においても、前部要素の促音の有無が〈式〉に関与している可能性が考えられる。

以上のことから、かつて京都方言をはじめとした〈式〉を有する京阪系諸方言では、前部要素の促音の有無が〈式〉の決定に関与するというシステムであったことが推測される。中近世期の京都方言の特徴を残す松山市・今治市は、そのかつての姿を保持しているのであろう。さらに、３拍語において同様の現象が、鹿児島方言・長崎方言にもみられることから、これらの地域においても、かつては３拍語だけでなく４拍語についても、前部要素の促音の有無がトーンの決定に関与するという、京阪系諸方言と同様の現象があった可能性が考えられる。

京阪系諸方言（鹿児島方言や長崎方言においても）では、小川晋史（2006）がいう、前部要素の拍数によって〈式〉（トーン）が決定するシステムではなく、松山市・

今治市のように、前部要素の音節構造によって〈式〉（トーン）が決定するシステムだったのではないだろうか。つまり、〈式〉（トーン）の決定は、もともと前部要素の音節構造によるものであったのが、音節構造に関係ないものへと変化した（現在、変化している）と考えられる。この考えに基づいて、変化の過程を図式化すると、以下の【図１】のようになる。なお、以下の【図１】では、〈式〉の有標性・無標性について、京都方言は中井幸比古（2002）をもとに、松山市・今治市は秋山英治（2017）をもとに、すべての地域において、高起系列の〈式〉が有標、低起系列の〈式〉を無標として示した。

【図１】前部要素の音節構造からみた〈式〉の決定システム

前部要素の音節構造が「軽軽＃」の場合、高起系列の〈式〉になり、「重＃」の場合には、前部要素の促音の有無によって、促音を含まなければ高起系列の〈式〉となり、促音を含めば低起系列の〈式〉となる。さらに「軽＃」の場合は、低起系列の〈式〉になる。つまり、〈式〉の決定に、音節構造が関与するシステムである（この段階を「第一段階」と呼ぶ）。この第一段階にあたるのが、松山市・今治市である。３拍語のH2型の残存状況、３．１で述べた「式保存規則」などから、松山市よりも今治市の方が古いということを確認してきたが、このシステムをより厳密に保持している（古いシステムを保持している）のは、むしろ松山市である。他の部分では、古形を保持する今治市が、２字漢語において、なぜ松山市より新しい状態にあるのか。

３．４．２で述べたように、今治市では、語彙的要素（「式保存規則」）が関与している可能性もあり、今後さらに考察を深めていく必要がある。なお、「重＃」の場合に、促音の有無によって〈式〉が決定するということから、特殊拍のなかで促音がもっとも有標であることがわかる[10)]。

ただし、このシステムは、「重＃」の場合に、促音の有無によって〈式〉がかわるという複雑で、また安定性の低いシステムであることから、より簡潔で安定性の高いシステムへ、つまり前部要素の促音の有無に関係なく、（無標な）高起系列の〈式〉へ変化しようとした。この変化の渦中にあるのが、現在の京都方言である[11)]。

京都方言では、「重＃重」「軽軽＃」（４拍語）の場合に、いち早くこの変化が起きたものの、前部要素が「軽＃」（３拍語）の場合には、まだこの変化が起きておらず、従来の前部要素の音節構造が〈式〉を決定するシステムを保持している（この段階を「第二段階」と呼ぶ）。アクセント付与システムが異なるため、慎重に考える必要があるが、現在の鹿児島方言・長崎方言も、この第二段階にあると考えることができよう（よって、鹿児島方言・長崎方言を、第二段階に準じるものとして、【図１】で、※を付して示した）。

さらに、変化が進めば、前部要素が「重＃」の場合すべてにおいて、（無標な）高起系列の〈式〉となる（この段階を「第三段階」と呼ぶ）。この段階まで変化が進めば、「軽軽＃」「重＃」のいわゆる前部要素が２拍の場合すべてにおいて同じ〈式〉となり、かつての前部要素の音節構造によって〈式〉が決定するシステムから、小川晋史（2006）のいう、前部要素の拍数によって〈式〉が決定するシステムへ変化したことになる。しかしながら、この第三段階まで変化が進んだ方言は、現時点では、みつかっていない。

大阪方言の２字漢語について報告した田中真一（2010）によれば、大阪方言において、「式保存規則」の保存率が、「軽軽＃」「重＃」「軽＃」の順に高く、音節構造の階層性（左に向かうほど、安定性が高い＝無標性が高い）があることを指摘している[12)]。本稿では、前部要素の〈式〉が確定できない語があることから、「式保存規則」については考察していないが、〈式〉の決定という共通する部分において、田中真一（2010）と同様の階層性が確認される。また、田中真一（2010）では、「式保存規則」の保存率が、高年話者より若年話者が低くなっていることから、音節構造が重視されなくなっていることを指摘しているが、この指摘は、上述した、前部要素の音節構造によって〈式〉が決定するシステムから、音節構造に関係のないシステム（前部要素の拍数によって〈式〉が決定するシステム）へ変化したということと通底している。田中真一（2010）の指摘との共通性ということから、もともと京阪系諸方言（鹿児島方言・長崎方言も）では、前部要素の音節構造が〈式〉の決定に関与するシステムで

あった可能性が高いと考えられる。

４．おわりに

以上、本稿では、愛媛県東中予地方に分布する「中央式」から、松山市・今治市の２地域をとりあげ、２字漢語について考察をおこなった。

その結果、〈下げ核〉の有無について、松山市・今治市では、小川晋史（2006）がいう、後部要素の拍数の長さが関与するのではなく、前部要素と後部要素の組み合わせによって〈下げ核〉の有無が決まる傾向があると考えられることが明らかになった。

〈式〉の決定については、松山市・今治市では、前部要素が「重 #」の音節構造において、促音を含まない場合、高起系列の〈式〉となり、促音を含む場合、低起系列の〈式〉となる、つまり〈式〉の決定に前部要素の音節構造が関与していることが明らかになった。また、京都方言、さらには鹿児島方言・長崎方言の状況も含めて比較検討したところ、松山市・今治市のように、〈式〉（トーン）の決定に前部要素の音節構造が関与するというシステムが、〈式〉を有する京阪系諸方言において古く存在しており、現在、京都方言（鹿児島方言・長崎方言）において、そのシステムから音節構造が関与しないシステムへと変化を起こしていると推測されることが明らかになった。

ただ、〈式〉の決定に音節構造が関与しないシステムへ完全に変化した方言はみつかっていない。いわゆる昇核現象（「○○｜○（H2型）→「○｜○○（H1型）、「○○｜○○（H2型）→「○｜○○○（H1型））など、京阪系諸方言で起きている諸現象について、京都方言（大阪方言も含むか）がいち早く変化していることから、現在、システム変化の渦中にある京都方言では、音節構造が関与しない新しいシステムへの変化が今後完了することが予想される。しかし、真田信治（1996）や中井幸比古（2002）など多くの報告で、京阪系諸方言において、若い世代で共通語化が起きていることを指摘しており、すんなりこの変化が進むか疑問である。２字漢語の〈式〉の決定について、もっとも古いシステムを残している松山市においても、秋山英治（2017）で述べたように、共通語化によって若い世代では〈式〉が完全に消失しており、【図１】で示したような変化の過程を確認することができない状況にある。今後、京都方言で変化がどのように進むのか、その動向を見守りつつ、〈式〉の決定に前部要素の音節構造が関与しないシステムへ変化が完了した方言がないか、調査地点・調査語を増やして確認していく必要があろう。

注

1）W・H氏、N・S氏ともに、愛媛県東中予方言のアクセントについて述べた秋山英治（2017）においてもご協力いただいている話者である。

2）２字漢語の例を示すと、以下のようになる。

１拍１音節＋２拍１音節（軽＃重）	加盟（カメイ）	３拍語
１拍１音節＋２拍２音節（軽＃軽軽）	加熱（カネツ）	３拍語
２拍１音節＋１拍１音節（重＃軽）	高価（コウカ）	３拍語
２拍１音節＋２拍１音節（重＃重）	高校（コウコウ）	４拍語
２拍１音節＋２拍２音節（重＃軽軽）	高圧（コウアツ）	４拍語
２拍２音節＋１拍１音節（軽軽＃軽）	発芽（ハツガ）	３拍語
２拍２音節＋２拍１音節（軽軽＃重）	発明（ハツメイ）	４拍語
２拍２音節＋２拍２音節（軽軽＃軽軽）	発熱（ハツネツ）	４拍語

3）２．２で述べたように、「運」「愛」など前部形態素単独で用いられる語は、前部形態素単独での調査もしている。そのため、それらの語は、「式保存規則」について考察することもできなくはない。しかし、語数としては多くなく、２字漢語一般のこととして述べることはできないため、本稿では触れないこととする。

4）松山市の最も生年の早い、1912年生まれの話者において、第２・４類にH2型はみられなかった。松山市では、H2型が、唯一「鼻血」（第１類）のみであった（秋山英治（2017））。ただし、３拍語すべてにおいて、H2型がみられないということではない。類別語彙以外には、W・H氏に、「形見（カタミ）」「豆屋（マメヤ）」のような２拍＋１拍の複合語や、「絞り（シボリ）」「作り（ツクリ）」のような転成名詞に、H2型がみられる。

京都方言における古形について、中井幸比古（2012b）には、次のような記述もある。なお、音調表記は、他の表記と紛れるおそれがあるため、中井幸比古（2012b）の表記のまま示す。

> しかし京都の、年齢が上のほうの世代については、前部要素の末尾に核がある、$\overline{○}$－○○○、$\overline{○}$－○○○○という型も現れる。たとえば「葉桜」は、予測どおりだと「$\overline{ハザ}$クラ」だが、その他に「$\overline{ハ}$ザクラ」と発音する人が、上の年代層には存在する。他にも、「目薬」が「メ$\overline{グ}$スリ」でなく、「$\overline{メ}$グスリ」となったり、「身ごしらえ」が「$\overline{ミゴ}$シラエ」ではなく、「$\overline{ミ}$ゴシラエ」のようになったりする人がいる。
>
> 実は、このような複合名詞の前部要素の末尾に核が置かれたアクセント型も、江戸時代以前の古い複合語アクセントの残存だと考えられている。

上記と同様の現象が今治市にみられることから、今治市は松山市より古いタイプであることがわかる。

5）考察においては、１つの語に複数の型がみられる（型が揺れている）場合、それぞれを１語と扱った。２字漢語全体としてみたときの型を拍数別に示すと、以下の【表14】【表15】のようになる。

【表14】３拍語

	H0型	H1型	H2型	L0型	L2型	合　計
松　山	7	49	1	73	1	131
	5.3%	37.4%	0.8%	55.7%	0.8%	100.0%
今　治	4	49	1	73	6	133
	3.0%	36.8%	0.8%	54.9%	4.5%	100.0%
京　都	11	48	1	64	6	130
	8.5%	36.9%	0.8%	49.2%	4.6%	100.0%

【表15】４拍語

	H0型	H1型	H2型	H3型	L0型	L2型	L3型	L4型	合　計
松　山	108	23	5	0	103	3	0	0	242
	44.6%	9.5%	2.1%	0.0%	42.6%	1.2%	0.0%	0.0%	100.0%
今　治	118	23	3	4	94	4	3	1	250
	47.2%	9.2%	1.2%	1.6%	37.6%	1.6%	1.2%	0.4%	100.0%
京　都	167	16	3	0	43	7	0	0	236
	70.8%	6.8%	1.3%	0.0%	18.2%	3.0%	0.0%	0.0%	100.0%

３拍語では、松山市・今治市・京都方言すべての地域において、大きな差はないが、４拍語では、京都方言のH0型が松山市・今治市より20ポイント程度高く、違う傾向を示している。

なお、同じ平山輝男編（1960）を用いて調査した小川晋史（2006）では、もっとも比率の高い型がH0型で80％、次いでL0型の9％、そしてH1型の8％となっており、本調査の結果と異なっている。今回の調査では、前部形態素を限定しての調査であるのに対して、小川晋史（2006）では、平山輝男編（1960）をすべて調査しており、調査語数の違いが関係している可能性が考えられる。

6）本稿で示す表は、各地域の上段が語数、下段が当該地域における比率を示している。

7）注５参照。

8）見方によっては、前部要素と後部要素、両要素の拍数が関与していると考えることができるかもしれない。この点については、現時点での考察が不十分である。今後さらに考察を深める必要がある。

9）ただし、今治市の「重＃軽軽」は、前部要素に促音を含む語を削除しても、依然として低起系列の〈式〉の比率の方が高く、唯一の例外となる。この理由については、現時点では不明である。

10）小川晋史（2010）によれば、東京方言においても、特殊拍のなかで、促音が例外的なふるまいをみせることについて、次のように指摘している（小川晋史（2010）のいう「H」は「重音節」、「L」は「軽音節」を表す）。

> 特殊拍が促音の場合の３モーラ H#L 構造の語は（全体に占める語数が多くないために目立たないが）特殊拍が撥音や長音の場合に比べると圧倒的に平板型になりやすい傾向が見られる（小川2003）。ただし、４モーラ語については特殊拍による違いは見られないようである。

この小川晋史（2010）の記述をもとに、松山市・今治市・京都方言の「重＃軽」について、前部要素の特殊拍を、撥音・長音・二重母音「イ」にわけて調査してみると、以下の【表16】～【表18】のようになる。

【表16】前部要素・撥音

	H0型	H1型	L0型	L2型	合計
松　山	0	14	1	0	15
	0.0%	93.3%	6.7%	0.0%	100.0%
今　治	0	12	1	2	15
	0.0%	80.0%	6.7%	13.3%	100.0%
京　都	0	12	2	1	15
	0.0%	80.0%	13.3%	6.7%	100.0%

【表17】前部要素・長音

	H0型	H1型	L0型	L2型	合計
松　山	0	12	4	0	16
	0.0%	75.0%	25.0%	0.0%	100.0%
今　治	0	8	5	3	16
	0.0%	50.0%	31.3%	18.8%	100.0%
京　都	0	9	4	3	16
	0.0%	56.3%	25.0%	18.8%	100.0%

【表18】前部要素・二重母音「イ」

	H0型	H1型	L0型	L2型	合計
松　山	0	5	3	0	8
	0.0%	62.5%	37.5%	0.0%	100.0%
今　治	0	5	3	0	8
	0.0%	62.5%	37.5%	0.0%	100.0%
京　都	0	6	1	0	8
	0.0%	85.7%	14.3%	0.0%	100.0%

語数がひじょうに少ないため、断言することは難しいが、撥音・長音・二重母音「イ」すべてにおいて、もっとも H1型の比率が高い。とくに、撥音は、松山市・今治市・京都方言すべての地域で、80％を超えている。長音・二重母音「イ」では、L0型も15％から38％程度みられるものの、音節構造が「重 #」において、前部要素が促音の場合は、L0型になり、促音以外は H1型になるという傾向が認められそである。

同様に、４拍語において、音節構造が「重 #」となる語について３拍語と同様に調査したが、松山市・今治市・京都方言では小川晋史（2010）がいうように、特殊拍による違いは確認されなかった。

11）小川晋史（2006）によれば、「重＃軽」において、高起系列の〈式〉の比率が74％となっており、すでに第三段階に変化したようにみえる。しかし、４．４．３で述べたように、同形態素という点でみると、京都方言では、前部要素の促音が含まれていれば低起系列の〈式〉となり、促音が含まれていなければ高起系列の〈式〉になるという傾向が認められる。小川晋史（2006）において、「重＃軽」の場合に、高起系列の〈式〉が高い比率を示しているのは、平山輝男編（1960）所収の語に、前部要素に促音を含む語が少なく、他の特殊拍を含む語が多い可能性が考えられる。

12）田中真一（2010）では、大阪方言において「式保存規則」に意味構造も関与していること、また意味構造についても、音節構造と同様に、若年話者では関与しなくなるという変化が起きていることを指摘している。

引用文献

秋山英治（2017）『愛媛県東中予方言のアクセントと共通語のアクセント－日本語史再建のために－』おうふう

小川晋史（2006）「京都方言２字漢語のアクセント」『音韻研究』９、pp. 91-97

小川晋史（2010）「日本語の諸方言における二字漢語のアクセント－単純語と複合語の狭間で－」『漢語の言語学』くろしお出版、pp. 77-90

真田信治（1996）『地域語の生態シリーズ関西編』おうふう

田中真一（2010）『漢語の言語学』くろしお出版、pp. 57-76

中井幸比古（1991）「大学生のアクセント⑵　―近畿地方の中央式諸方言について⑵―」『香川大学一般教育研究報告』39、pp. 183-248
中井幸比古（2002）『京阪系アクセント辞典』勉誠出版
中井幸比古（2012a）「複合語のアクセント⑴」『日本語アクセント入門』（三省堂）、pp. 146-163
中井幸比古（2012b）「複合語のアクセント⑵」『日本語アクセント入門』（三省堂）、pp. 164-181
平山輝男編（1960）『全国アクセント辞典』東京堂出版（26版）
松浦年男（2009）「長崎方言における二字漢語のアクセント型」『九州大学言語学論集』30、pp. 29-58（松浦年男（2014）『長崎方言からみた語音調の構造』ひつじ書房に再録）
松浦年男（2014）『長崎方言からみた語音調の構造』ひつじ書房

附　記

調査において、話者の方をはじめ、話者の方をご紹介くださった方など、多くの方にお世話になりました。個人情報の点から、お名前をあげることは控えますが、ご協力いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

本研究は、JSPS 科研費「芸予諸島方言におけるアクセントの研究」（17K02733）の助成を受けたものです。

資料編

資料編として、末尾に、松山市（W・H 氏、1950年生まれ）・今治市（N・S 氏、1943年生まれ）とともに、平山輝男編（1960）所収の京都方言のデータを示す。平山輝男編（1960）には、東京（共通語）・鹿児島のデータが掲載されていることから、これらのデータも併せて示す。さらに、本調査のもととなった、松浦年男（2009）から長崎方言のデータも示す。

データについては、拍数、語、読み、音節構造、各地域（松山市・今治市・京都・鹿児島・長崎・共通語の順）の型の順に示す。

型の表記については、２．２で示した表記を用いる。その他に、話者の疑問を「?」、筆者の疑問を「$」で表す。型が揺れている場合は、「H1、L2」のように示す。

長崎方言については、松浦年男（2009）で、４人の話者のデータを示していることからそれを反映するために、４人全員が同じ型の場合はとくに示さず、３人の話者が同じ型（１人だけ型が違う）場合を「A”」のように、型の横に「”」を加えて示す（なお、松浦年男（2009）には、型が２人ずつにわかれる語はない）。

拍数	語	読み	音節構造	松山 W·H 1950年生	今治 N·S 1943年生	京都 平山（1960）	鹿児島 平山（1960）	長崎 松浦（2009）	共通語 平山（1960）
4	愛嬌	アイキョウ	重#重	H1	H1	H1	B	B	3
4	愛犬	アイケン	重#重	L0	H0	L0	B	B	0
4	愛好	アイコウ	重#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	愛国	アイコク	重#軽軽	L0	H0	L0	B	B	0
4	愛妻	アイサイ	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	愛人	アイジン	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	愛憎	アイゾウ	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
3	運河	ウンガ	重#軽	H1	H1	H1	A	A	1
4	運休	ウンキュウ	重#重	L0	H2,H0	H0	A	A	0
4	運行	ウンコウ	重#重	H0	H0,L0	H0	A	B	0
4	運勢	ウンセイ	重#重	H1	H1	L2	A	A	1
4	運送	ウンソウ	重#重	H0	L0	H0	A	B	0
4	運賃	ウンチン	重#重	H1	H1	L2	A	B	1
4	運転	ウンテン	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	運動	ウンドウ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
3	運輸	ウンユ	重#軽	H1	L2	L0	A	A	1,0
4	運用	ウンヨウ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
3	王位	オウイ	重#軽	H1	L2	H1	B	A	1
4	王冠	オウカン	重#重	L0	L0	H0	B	B	0
4	王宮	オウキュウ	重#重	L0	L0	H0	B	B	0
4	王国	オウコク	重#軽軽	L0	L0	H0	B	A”	0
3	王座	オウザ	重#軽	H1	L2	H1	B	A	1
3	王子	オウジ	重#軽	H1	L2	L2	B	A	1
4	王室	オウシツ	重#軽軽	L0	L0	H0	B	B	0
4	王族	オウゾク	重#軽軽	L0	L0	H0	B	B”	0
4	王道	オウドウ	重#重	L0	L0	H0	B	B	0
3	王妃	オウヒ	重#軽	H1	?L0	H1	B	A	1
3	開花	カイカ	重#軽	L0	L0	H1	B	B	1
4	開会	カイカイ	重#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	開館	カイカン	重#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	開業	カイギョウ	重#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	開口	カイコウ	重#重	H0	H0	-	-	B	-
4	開催	カイサイ	重#重	H0	H0	H0	B	B	0
3	開始	カイシ	重#軽	L0	L0	L0	B	B	0
3	開示	カイジ	重#軽	L0	L0	-	-	B	-
4	開拓	カイタク	重#軽軽	H0	H0	H0	B	B	0
4	開通	カイツウ	重#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	開店	カイテン	重#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	開発	カイハツ	重#軽軽	H0	H0	H0	B	B	0
4	開閉	カイヘイ	重#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	開幕	カイマク	重#軽軽	H0	H0	H0	B	B	0
3	加害	カガイ	軽#重	L0	L0	L0	A	B”	0
3	加減	カゲン	軽#重	H0	H0	H0	B	B	0
3	加工	カコウ	軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	加算	カサン	軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	加勢	カセイ	軽#重	L0	L0	L0	B	B	0
3	加担	カタン	軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	加熱	カネツ	軽#軽軽	L0	L0	L0	A	B	0
3	加筆	カヒツ	軽#軽軽	L0	L0	L0	A	B	0
3	加法	カホウ	軽#重	H1	?H1	H1	A	B	1,0
3	加盟	カメイ	軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	記憶	キオク	軽#軽軽	L0	H1	H0	A	B	0
3	記号	キゴウ	軽#重	H0	H0	H0	A	B	0

拍数	語	読み	音節構造	松山 W･H 1950年生	今治 N･S 1943年生	京都 平山（1960）	鹿児島 平山（1960）	長崎 松浦（2009）	共通語 平山（1960）
3	記載	キサイ	軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	記述	キジュツ	軽#軽軽	L0	L0	H1	A	B	0
3	記帳	キチョウ	軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	記入	キニュウ	軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	記念	キネン	軽#重	L0	H1	H1	A	B	0
4	共学	キョウガク	重#軽軽	H0	H0	H0	A	B	0
4	共感	キョウカン	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	共済	キョウサイ	重#重	H1	H1	H0	A	B	0
4	共催	キョウサイ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	共存	キョウソ（ゾ）ン	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	共犯	キョウハン	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	共謀	キョウボウ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	共鳴	キョウメイ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	共有	キョウユウ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	共用	キョウヨウ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
3	軍医	グンイ	重#軽	H1	L2	L2	B	A	1
3	軍歌	グンカ	重#軽	H1	H1	H1	B	A	1
4	軍艦	グンカン	重#重	L0	L0	L0	B	B	0
4	軍人	グンジン	重#重	L0	L0	L0	B	B	0
4	軍隊	グンタイ	重#重	H1	H1	H1	B	A	1
4	軍閥	グンバツ	重#軽軽	$H0	L0	H1	B	B	0
3	軍務	グンム	重#軽	H1	H1	H1	B	A	1
4	軍律	グンリツ	重#軽軽	$H0	L0	H0	B	B	0
4	軍令	グンレイ	重#重	H0	L0	H0	B	B	0
4	高圧	コウアツ	重#軽軽	H0	H3,H0	H0	B	B	0
3	高位	コウイ	重#軽	H1	H1	H1	B	A	1
4	高温	コウオン	重#重	H0	H0	H0	B	B	0
3	高価	コウカ	重#軽	H1	H1	H1	B	A	1
4	高額	コウガク	重#軽軽	H0	H0	H0	B	B	0
4	高官	コウカン	重#重	H0	H0	H0	B	B	0
3	高貴	コウキ	重#軽	H1	H1	H1	B	A	1
4	高級	コウキュウ	重#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	高潔	コウケツ	重#軽軽	H0	H0	H0	B	B	0
4	高原	コウゲン	重#重	H0	H0	H0	B	B”	0
4	高校	コウコウ	重#重	L0	L0	L0	B	B	0
3	高所	コウショ	重#軽	H1	H1	H1	B	A	1
4	高尚	コウショウ	重#重	H0	L0	L0	B	B	0
4	高層	コウソウ	重#重	H0	L0	H0	B	B	0
4	高速	コウソク	重#重	H0	L2,H1	H0	B	B	0
4	高低	コウテイ	重#重	H0	H0	H0	B	B	0
3	高度	コウド	重#軽	H1	H1	H1	B	A	1
4	高等	コウトウ	重#重	L0	L0	H0	B	B	0
4	高騰	コウトウ	重#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	高熱	コウネツ	重#軽軽	H0	H3,H0	H0	B	B	0
4	高齢	コウレイ	重#重	H0	H0	H0	B	B	0
3	作為	サクイ	軽軽#軽	H1	?H1	H1	A	A	1,2
3	作詞	サクシ	軽軽#軽	L0	?L0	H0	B	B	0
3	作者	サクシャ	軽軽#軽	H1	?L0	H1	A	A”	1,0
3	作図	サクズ	軽軽#軽	L0	H1	L0	B	B	0
4	作成	サクセイ	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	作戦	サクセン	軽軽#重	H1	H0	H0	B	B	0
4	作品	サクヒン	軽軽#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	作風	サクフウ	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B	0

拍数	語	読み	音節構造	松山 W・H 1950年生	今治 N・S 1943年生	京都 平山（1960）	鹿児島 平山（1960）	長崎 松浦（2009）	共通語 平山（1960）
4	作文	サクブン	軽軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	作家	サッカ	重#軽	?L0	H1	H2	A	B	0,1
3	参加	サンカ	重#軽	L0	L0	L0	A	B	0,1
3	参賀	サンガ	重#軽	H1	H1	H1	A	A	1
4	参会	サンカイ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	参画	サンカク	重#軽軽	H0	H0	H0	A	B	0
4	参観	サンカン	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
3	参議	サンギ	重#軽	H1	H1	H1	A	B”	1
4	参考	サンコウ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	参照	サンショウ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	参上	サンジョウ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	参戦	サンセン	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	参堂	サンドウ	重#重	H0	H0	-	-	B	-
4	参入	サンニュウ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	参拝	サンパイ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	参謀	サンボウ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
3	参与	サンヨ	重#軽	H1	H1	H1	A	A	1
4	参列	サンレツ	重#軽軽	H0	H3,H0	H0	A	B	0
3	市営	シエイ	軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	市外	シガイ	軽#重	H1	H1	H1	A	A	1
3	市場	シジョウ	軽#重	L0	H1,L0	L0	A	B	0,1
3	市長	シチョウ	軽#重	H1	H1	H1	A	A	2
3	市内	シナイ	軽#重	H1	H1	H1	A	A	1
3	市立	シリツ	軽#軽軽	L0	L0	L0	A	B	1
3	市民	シミン	軽#重	H1	H1	H1	A	A	1
3	自愛	ジアイ	軽#重	H1	L0	H1	A	B	0
3	自衛	ジエイ	軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	自害	ジガイ	軽#重	H1	H1	H1	A	B”	1
3	自覚	ジカク	軽#軽軽	L0	L0	L0	A	B	0
3	自決	ジケツ	軽#軽軽	L0	L0	L0	A	B	0
3	自作	ジサク	軽#軽軽	L0	L0	L0	A	B	0
3	自失	ジシツ	軽#軽軽	L0	L0	L0	A	B	0
3	自習	ジシュウ	軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	自称	ジショウ	軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	自信	ジシン	軽#重	H0	L0	L0	A	B	0
3	自炊	ジスイ	軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	自制	ジセイ	軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	自責	ジセキ	軽#軽軽	L0	L0	L0	A	B”	0
3	自説	ジセツ	軽#軽軽	L0	H1	L0	A	B	0
3	自足	ジソク	軽#軽軽	L0	L0	L0	A	B”	0
3	自宅	ジタク	軽#軽軽	L0	L0	L0	A	B	0
3	自転	ジテン	軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	自認	ジニン	軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	自発	ジハツ	軽#軽軽	L0	L0	L0	A	B	0
3	自筆	ジヒツ	軽#軽軽	L0	L0	L0	A	B	0
3	自分	ジブン	軽#重	H0	H0	L0	B	B	0
3	自慢	ジマン	軽#重	L0	L0	L0	B	A”	0
3	自滅	ジメツ	軽#軽軽	L0	L0	L0	A	B	0
3	自由	ジユウ	軽#重	H1	H1	L2	B	B	2
3	自力	ジリキ	軽#軽軽	L0	L0	H1	A	B	0
3	自立	ジリツ	軽#軽軽	L0	L0	L0	A	B	0
4	実印	ジツイン	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B”	0
3	実家	ジッカ	重#軽	L0	L0	L0	B	B	0

拍数	語	読　み	音節構造	松山 W･H 1950年生	今治 N･S 1943年生	京都 平山（1960）	鹿児島 平山（1960）	長崎 松浦（2009）	共通語 平山（1960）
4	実感	ジッカン	重#重	L0	L0	H0	B	B	0
4	実況	ジッキョウ	重#重	L0	L0	H0	B	B	0
3	実施	ジッシ	重#軽	L0	L0	L0	B	B	0
3	実地	ジッチ	重#軽	L0	L0	L0	B	B	0
3	実母	ジツボ	軽軽#軽	H1	H2,H1	H0	B	A”	1
4	実名	ジツメイ	軽軽#重	L0	H0	H0	B	B	0
3	実利	ジツリ	軽軽#軽	H1	L2	L2	B	A”	1,2
3	出火	シュッカ	重#軽	L0	L0	L0	B	B	0
3	出荷	シュッカ	重#軽	L0	L0	L0	B	B	0
4	出願	シュツガン	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	出勤	シュッキン	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
3	出家	シュッケ	重#軽	L0	L0	H0	B	B	0
4	出撃	シュツゲキ	軽軽#軽軽	H0	H0	H0	B	B	0
4	出欠	シュッケツ	重#軽軽	L0	L0	H0	B	B	0
4	出血	シュッケツ	重#軽軽	L0	L0	H0	B	B	0
4	出現	シュツゲン	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	出港	シュッコウ	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	出獄	シュツゴク	軽軽#軽軽	H0	H0	H0	B	B	0
3	出資	シュッシ	重#軽	L0	L0	L0	B	B	0
3	出所	シュッショ	重#軽	L0	L0	H0	B	B	0,1
4	出生	シュッショウ	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	出場	シュツジョウ	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	出身	シュッシン	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
3	出世	シュッセ	重#軽	L0	L0	H0	B	B	0
4	出征	シュッセイ	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	出席	シュッセキ	重#重	L0	L0	H0	B	B	0
4	出廷	シュッテイ	重#重	L0	L0	H0	B	B	0
3	出土	シュツド	軽軽#軽	H0	L0	H1	B	B”	0
4	出頭	シュットウ	重#重	L0	L0	H0	B	B	0
4	出動	シュツドウ	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B	0
3	出馬	シュツバ	軽軽#軽	H0	L0	H0	B	B	0
4	出発	シュッパツ	重#軽軽	L0	H3,H0	H0	B	B	0
4	出版	シュッパン	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
3	出費	シュッピ	重#軽	L0	L0	L0	B	B	0
4	出品	シュッピン	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	出塁	シュツルイ	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	職員	ショクイン	軽軽#重	H2	H0	H0	A	A	2
4	職業	ショクギョウ	軽軽#重	H2	H2	H2	A	A	2
3	職種	ショクシュ	軽軽#軽	H0	H1	H1	A	B”	0,1
3	職務	ショクム	軽軽#軽	H2	H1	H1	A	A	1,2
4	職歴	ショクレキ	軽軽#軽軽	H0	H0	H0	A	B	0
4	職権	ショッケン	重#重	H0	L0	H0	A	B	0
4	職工	ショッコウ	重#重	H0	L0	L0	A	B	0
4	石材	セキザイ	軽軽#重	H0	H0	H1	A	A	0
4	石像	セキゾウ	軽軽#重	H0	H0	H0	A	A	0
4	石炭	セキタン	軽軽#重	H1	H2,H1	H1	A	B	3
4	石版	セキバン	軽軽#重	H0	H0	H0	A	A	0
4	石盤	セキバン	軽軽#重	H0	H0	H0	A	B”	0
3	石碑	セキヒ	軽軽#軽	L0	L0	H0	A	A	0
4	石墨	セキボク	軽軽#重	H0	H0	L0	A	B	0
3	石油	セキユ	軽軽#軽	L0	H0	L0	A	B”	0
4	石灰	セッカイ	重#重	H1	L0	L0	A	A	1
3	石器	セッキ	重#軽	L0	L0	L0	A	B”	0

拍数	語	読み	音節構造	松山 W・H 1950年生	今治 N・S 1943年生	京都 平山（1960）	鹿児島 平山（1960）	長崎 松浦（2009）	共通語 平山（1960）
4	石鹸	セッケン	重#重	H1	H0	H0	A	B	0
4	石膏	セッコウ	重#重	L0	L0	L0	A	B	0
4	絶縁	ゼツエン	軽軽#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	絶海	ゼッカイ	重#重	L0	L0	H0	A	A”	0
4	絶景	ゼッケイ	重#重	L0	L0	H0	A	B	0
4	絶好	ゼッコウ	重#重	L0	L0	H0	A	B	0
4	絶交	ゼッコウ	重#重	L0	L0	H0	A	B	0
4	絶賛	ゼッサン	重#重	L0	L0	H0	A	B	0
4	絶大	ゼツダイ	軽軽#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	絶頂	ゼッチョウ	重#重	L0	L0	H0	A	B	0,2
4	絶版	ゼッパン	重#重	L0	L0	H0	A	B	0
4	絶筆	ゼッピツ	重#軽軽	L0	L0	H0	A	B	0
4	絶壁	ゼッペキ	重#軽軽	L0	L0	H0	A	B	0
4	絶望	ゼツボウ	軽軽#重	L0	H0	H0	A	B	0
3	絶無	ゼツム	軽軽#軽	L2	H1	H1	A	B	1
4	絶命	ゼツメイ	軽軽#重	L0	H0	H0	A	B	0
4	絶滅	ゼツメツ	軽軽#軽軽	L0	H0	H0	A	B	0
3	大火	タイカ	重#軽	H1	H1	H1	A	A	0,1
3	大河	タイガ	重#軽	H1	H1	H1	A	A	1
4	大会	タイカイ	重#重	H0	L0	H0	A	B	0
3	大気	タイキ	重#軽	H1	H1	H1	A	A	1
4	大金	タイキン	重#重	H0	L0	H0	A	B	0
4	大群	タイグン	重#重	H0	L0	H0	A	B	0
3	大差	タイサ	重#軽	H1	H1	H1	A	A	1
4	大衆	タイシュウ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	大正	タイショウ	重#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	大食	タイショク	重#軽軽	H0	L0	L0	A	B	0
4	大切	タイセツ	重#軽軽	L0	L0	L0	B	A	0
4	大戦	タイセン	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	大敵	タイテキ	重#軽軽	H0	L0	H0	A	B	0
3	大破	タイハ	重#軽	H1	H1	H1	A	A	1
4	大敗	タイハイ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	大半	タイハン	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	大変	タイヘン	重#重	L0	L0,L4	L0	A	A”	0
4	大砲	タイホウ	重#重	L0	L0	L0	A	A	0
4	大役	タイヤク	重#軽軽	H0	L0	H0	A	B”	0
4	大洋	タイヨウ	重#重	L2	L2	H0	A	A”	0
4	大陸	タイリク	重#軽軽	L0	L0	L0	A	B”	1,0
4	大量	タイリョウ	重#重	L0	L0	H0	A	B	0
4	中央	チュウオウ	重#重	L0	L0	L2	A	B	3,0
4	中核	チュウカク	重#軽軽	L0	L0	L0	A	B	0
4	中学	チュウガク	重#軽軽	$H1,L2	L2	L2	A	A	1
4	中間	チュウカン	重#重	L0	L0	L0	A	B	0
4	中級	チュウキュウ	重#重	L0	L0	L0	A	B	0
4	中継	チュウケイ	重#重	H0	L0	L0	A	B	0
4	中元	チュウゲン	重#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	中古	チュウコ	重#軽	L0	L0	L2	A	B	1
4	中国	チュウゴク	重#軽軽	L2	L2	L2	A	A	1
3	中座	チュウザ	重#軽	L0	L0	L0	A	B	0
3	中止	チュウシ	重#軽	L0	L0	L0	A	B	0
4	中軸	チュウジク	重#軽軽	L0	L0	L0	A	B	0
4	中秋	チュウシュウ	重#重	H0	L0	L0	A	B	0
4	中傷	チュウショウ	重#重	L0	L0	L0	A	B	0

拍数	語	読み	音節構造	松山 W･H 1950年生	今治 N･S 1943年生	京都 平山（1960）	鹿児島 平山（1960）	長崎 松浦（2009）	共通語 平山（1960）
4	中小	チュウショウ	重#重	H1	L3	-	-	A”	-
4	中心	チュウシン	重#重	L0	L0	L0	A	B	0
4	中世	チュウセイ	重#重	H1	H1	L2	A	A	1
4	中性	チュウセイ	重#重	L0	L0	L0	A	A”	0
4	中東	チュウトウ	重#重	L0	L0	L2	A	B	0
4	中等	チュウトウ	重#重	L0	L0	L0	A	B	0
4	中毒	チュウドク	重#軽軽	H1	H1	H1	A	A	1
4	中年	チュウネン	重#重	L0	L0	L0	A	B”	0
4	中盤	チュウバン	重#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	中部	チュウブ	重#軽	H1	H1	L2	A	A	1
4	中腹	チュウフク	重#軽軽	H0	L0	L0	A	B	0
4	中立	チュウリツ	重#軽軽	L0	L0	L0	A	B	0
4	中略	チュウリャク	重#軽軽	H1	L0	L0	A	B	0,1
4	中流	チュウリュウ	重#重	L0	L0	L0	A	B	0
3	中和	チュウワ	重#軽	L0	L0	L0	A	B	0
3	天下	テンカ	重#軽	H1	H1	H1	A	A	1
3	天気	テンキ	重#軽	H1	H1	H1	A	A	1
4	天災	テンサイ	重#重	H0	H0	H0	A	B	0
4	天職	テンショク	重#軽軽	H1	H1	H1	A	A	0
4	天体	テンタイ	重#重	H0	?H0	H0	A	B	0
3	天女	テンニョ	重#軽	H1	H1	H1	A	A	1
4	日銀	ニチギン	軽軽#重	L0	L0	L0	B	A”	0
3	日時	ニチジ	軽軽#軽	H1	H1	H1	B	A”	1,2
4	日常	ニチジョウ	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	日独	ニチドク	軽軽#軽軽	H2	H1	H1	B	A”	1
4	日仏	ニチフツ	軽軽#軽軽	H2	H1	H1	B	A	1
4	日米	ニチベイ	軽軽#重	H1	H1	H1	B	A	1
4	日没	ニチボツ	軽軽#軽軽	L0	H0	H0	B	B	0
3	日夜	ニチヤ	軽軽#軽	H1	H1	H1	B	A	1,2
4	日曜	ニチヨウ	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B	0,3
4	日輪	ニチリン	軽軽#重	H2	H1	H1	B	A”	0,2
3	日課	ニッカ	重#軽	L0	L0	L0	B	B	0
4	日刊	ニッカン	重#重	L0	L0	L0	B	B	0
3	日記	ニッキ	重#軽	L0	L0	L0	B	B	0
4	日給	ニッキュウ	重#重	L0	L0	H0	B	B”	0
4	日勤	ニッキン	重#重	L0	L0	H0	B	B	0
4	日光	ニッコウ	重#重	H1	H1	H2	B	A	1
4	日産	ニッサン	重#重	L0	L0	L0	B	B	0
3	日誌	ニッシ	重#軽	L0	L0	H0	B	B	0
4	日収	ニッシュウ	重#重	L0	L0	H0	B	B	0
4	日食	ニッショク	重#軽軽	L0	?H1	H0	B	B	0
4	日数	ニッスウ	重#重	L0,H0	L0	H0	B	B	2
4	日赤	ニッセキ	重#軽軽	L0	L0	L0	B	B	0
4	日中	ニッチュウ	重#重	L0	H1	L0	B	A	0
4	日直	ニッチョク	重#軽軽	L0	L0	L0	B	B	0
4	日程	ニッテイ	重#重	L0	L0	L0	B	B	0
4	日当	ニットウ	重#重	L0	L0	H0	B	B	0
4	日本	ニッポン	重#重	H1	H1	H2	B	B	3
3	馬脚	バキャク	軽#軽軽	L0	L0	L0	A	B	0
3	馬術	バジュツ	軽#軽軽	H1	H1	H1	A	A	1
3	馬上	バジョウ	軽#重	L0	L0	L0	A	B	0
4	発案	ハツアン	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	発育	ハツイク	軽軽#軽軽	H0	H0	H0	A	B	0

拍数	語	読み	音節構造	松山 W・H 1950年生	今治 N・S 1943年生	京都 平山（1960）	鹿児島 平山（1960）	長崎 松浦（2009）	共通語 平山（1960）
3	発火	ハッカ	重#軽	L0	L0	L0	B	B	0
3	発芽	ハツガ	軽軽#軽	L0	L0	L0	A	B	0
4	発覚	ハッカク	重#軽軽	L0	L0	L0	B	B	0
4	発刊	ハッカン	重#重	L0	L0	H0	B	B	0
3	発揮	ハッキ	重#軽	L0	L0	L0	B	B”	0,1
4	発掘	ハックツ	重#軽軽	L0	L0	H0	A	B	0
4	発見	ハッケン	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	発言	ハツゲン	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	発行	ハッコウ	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	発酵	ハッコウ	重#重	L0	L0	H0	B	B	0
4	発散	ハッサン	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
3	発射	ハッシャ	重#軽	L0	L0	L0	B	B	0
4	発信	ハッシン	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	発声	ハッセイ	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	発生	ハッセイ	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	発送	ハッソウ	重#重	L0	L0	H0	B	B	0
4	発想	ハッソウ	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	発注	ハッチュウ	重#重	L0	L0	H0	B	B	0
4	発展	ハッテン	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	発動	ハツドウ	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	発熱	ハツネツ	軽軽#軽軽	H0	H0	H0	A	B	0
3	発破	ハッパ	重#軽	L0	H1	L0	A	B	0
4	発売	ハツバイ	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	発病	ハツビョウ	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	発表	ハッピョウ	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	発奮	ハップン	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	発砲	ハッポウ	重#重	L0	H0	H0	B	B	0
4	発明	ハツメイ	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B	0
4	発令	ハツレイ	軽軽#重	H0	H0	H0	B	B	0
3	発露	ハツロ	軽軽#軽	H1	H1	H1	B	A	1
3	馬力	バリキ	軽#軽軽	H1	H1	H1	A	A	0
4	別館	ベッカン	重#重	L0	L0	L0	B	B	0
3	別記	ベッキ	重#軽	H1	L0	L0	B	B	0,1
3	別居	ベッキョ	重#軽	L0	L0	L0	B	B	0
4	別人	ベツジン	軽軽#重	L0	L0	H0	B	B	0
4	別席	ベッセキ	重#軽軽	L0	L0	H0	B	B	0
4	別便	ベツビン	軽軽#重	L0	L0	L0	B	B	0
3	本意	ホンイ	重#軽	H1	H1	H1	A	A	1
4	本校	ホンコウ	重#重	H1	H1	H1	A	A	0
4	本国	ホンゴク	重#軽軽	H1	H1	H1	A	A”	1
3	本社	ホンシャ	重#軽	H1	H1	H1	A	A	1
4	本籍	ホンセキ	重#軽軽	H1	H1	H1	A	A	1,0
4	本体	ホンタイ	重#重	H1	H1	H1	A	A	1,0
3	本部	ホンブ	重#軽	H1	H1	H1	A	A	1
4	本文	ホンブン	重#重	H1	H1	H1	A	A	1
4	有益	ユウエキ	重#軽軽	H0	L3,L0	H0	B	B	0
3	有期	ユウキ	重#軽	H1	H1	L0	B	A	1
4	有給	ユウキュウ	重#重	$H0,L0	L0	H0	B	B	0
4	有限	ユウゲン	重#重	H0	L0	H0	B	B”	0
4	有毒	ユウドク	重#軽軽	H0	L0	H0	B	B”	0
3	有利	ユウリ	重#軽	H1	H1	H1	B	A	1
4	有力	ユウリョク	重#軽軽	H0	L3,L0	H0	B	B	0